



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書
Citation	研究論集, 20, 187 (左) -195 (左)
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80801
Type	other
File Information	13_rjgshhs_20_p187-195_l.pdf



リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」について

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」は、文学院博士後期課程の学生をリサーチ・アシスタントとして採用することにより、学生を経済的に支援し、博士論文の早期提出および内容の充実を図るとともに、学生の研究環境の充実および若手研究者としての研究遂行能力を養成することを目的としています。

文学院には、令和元年度、161名の博士後期課程の大学院生が在籍し、そのうち7名がリサーチ・アシスタントとして独自のテーマについて研究を進めてきました。その研究テーマ一覧と、1年間の研究成果の概要報告を、『研究論集』の資料として掲載しています。

研究テーマ一覧

令和元年度

氏 名	研 究 テ ー マ	頁
金 城 卓 司	価値割引における非整合性と符号効果に関する行動経済学的研究	189
黄 也	戦後成瀬巳喜男映画の研究	190
鈴 木 一 生	Herman Melville 作品における語り手像と物語論	191
蘇 有 安	証明論による認識論理研究	192
鄭 門 鎬	漢籍訓読資料の位相差における漢音モデル化	193
福 井 慶 丈	近代朝鮮における美術史研究と京都学派哲学	194
吉 田 勉	今文学派における「微言大義」の言説史	195

研究成果の概要

研究テーマ	価値割引における非整合性と符号効果に関する行動経済学的研究
R A 氏 名	きん じょう たく じ 金 城 卓 司
専攻・専修・学年	人間システム科学専攻 行動システム科学専修 博士後期課程3年
指導教員氏名	高 橋 泰 城
研究成果の概要	
【目的】 人は報酬の主観的価値を、報酬の受け手との社会的距離が増大するほど割り引く（社会割引；Jones & Rachlin, 2006）。また、報酬の主観的価値を時間とともに割り引くことも知られている（時間割引；Frederick et al., 2002）。これらはまとめて価値割引と呼ばれ、理論的・実証的類似性があると言われている。では、社会割引研究は時間割引研究のように実社会へ応用することは可能だろうか。時間割引の非整合性や符号効果（割引が損失より損失で大きい現象）は、健康問題行動と関連することが知られている（Ikeda et al., 2010）。しかし一方で社会割引においては、非整合性と割引の大きさを区別しないモデルで分析を行った研究が多い。また区別したモデルを用いても、報酬と損失とで適切なモデルが異なる可能性がある。さらに、符号効果についての結果は先行研究間で一貫していない。そこで本研究では社会割引において割引の大きさと非整合性を区別したモデルを用い、場面（報酬・損失）ごとに適切なモデルを検討し、符号効果の頑健性を確認する。 【研究計画】 質問紙データの入力、確認後に、統計ソフト R を用いてデータ分析（下記のモデル比較およびパラメータ推定）を行った。得られた結果について外部の共同研究者とも議論を重ね、健康問題行動との関連について論じた。これらの一連の成果は、学術論文として国際誌掲載された。 【成果】 社会割引の大きさと非整合性を区別しないモデルと、これらを区別するモデル（q-指数割引モデル、双曲べきモデル）の計4つのモデルを用いて、モデル比較およびパラメータ推定を行ったところ、報酬条件においては双曲べきモデルが、損失条件においては q-指数割引モデルがもっともあてはまりが良かった。これは先行研究（Ishii & Eisen, 2018）の結果と整合する。またグループレベルの分析で、報酬の方が損失よりも割引が大きかった（符号効果が見られた）。これは先行研究（Ishii & Eisen, 2018）の結果と整合しない。	

研究テーマ	戦後成瀬巳喜男映画の研究
R A 氏 名	こう や 黄 也
専攻・専修・学年	人文学専攻 表現文化論専修 博士後期課程3年
指導教員氏名	阿 部 嘉 昭
研究成果の概要	
【研究の目的】 今年度の本研究の目的は、戦後成瀬巳喜男の作品の現代性を示すことであった。 【研究の成果】 最初の成果としては論文「成瀬巳喜男『乱れ雲』、あるいは苦難＝情念」が挙げられる。『乱れ雲』は成瀬の遺作であり、先行研究で日本映画史上のメロドラマの傑作としてしばしば認識されている。しかし、本研究では『乱れ雲』がメロドラマであると同時に、その枠組みから逸脱するものを特異性として見做して評価する。まず、「交通事故戦争」の歴史的な言説を確認しつつ、成瀬の交通事故の作品群において、『乱れ雲』の特殊な位置づけを示した。そして、「負債関係とその転倒」、「苦難＝情念」の特徴がどのようにメロドラマ構造を破壊するののかの特徴を分析し、そして、古典メロドラマ代表作であるダグラス・サークの『心のともしび』との類似性を指摘した上で、『心のともしび』ではニーチェが指摘した贈与論が負債論として機能するキリスト教映画の構造的性を明らかにした。それに対して、『乱れ雲』がメロドラマの構造を前提としない特異性を評価した。 次の成果としては日本映像学会で「成瀬巳喜男作品における〈働く母〉——〈田中絹代三部作〉をめぐる」について発表したことが挙げられる。女優・田中絹代が主演した成瀬巳喜男監督作品『銀座化粧』、『おかあさん』、『流れる』を〈田中絹代三部作〉と呼び、これらに共通する〈働く母〉の形象を論じた。先行研究では、見落とした成瀬巳喜男監督作品と田中絹代像の関係性を提示した。〈田中絹代三部作〉の〈働く母〉の表象の変遷を辿り、歴史的制約を踏まえて、その可能性と限界とを指摘し、これにより、成瀬巳喜男監督作品や田中絹代研究において、新しい視座をもたらすことを試みた。 最後の成果としては、中国の学術誌『当代電影』が主催した「日本映画監督の現在」の特集のなかで、三宅唱監督についての査読論文と濱口竜介監督の翻訳文が挙げられる。三宅と濱口監督作品のなかの歩行、目線などの演出についての分析は、成瀬映画を現代的に読み直すことに役に立った。	

研究テーマ	Herman Melville 作品における語り手像と物語論
R A 氏名	すずき いっせい 鈴木 一生
専攻・専修・学年	言語文学専攻 西洋文学専修 博士後期課程3年
指導教員氏名	竹内 康浩
研究成果の概要	
本研究では、19世紀アメリカ文学作家ハーマン・メルヴィルの散文作品を扱い、文学理論の一分野である物語論において盛んに議論されてきた、小説の「語り手」と「作者」の関係について明らかにすることを目的とした。研究方法としては、文学研究の伝統的な手法である精読を行い、複数の作品に共通して現れるパターンを解明し、メルヴィルが描いた語り手像の特質を明らかにしようと試みた。研究計画としては、『白鯨』をはじめとしたメルヴィル小説に加え、同時代作家のナサニエル・ホーソーン等、彼に影響を与えた作家の作品や、文学理論や文学史に関する文献の調査も同時に行い、さらに宗教や文化的背景についての先行研究も参照し、メルヴィル作品群の中心的主題を明らかにすることを目指した。その結果、キリスト教カルヴィニズムの影響下にあり、自分自身と神のどちらに従って生きるべきかと葛藤し続けたメルヴィルの内面が、彼の作品においては、自由意志を体現する語り手と神意を体現する語り手の分身という形式で発露することが明らかになった。さらに、その分身には、予定論的にすでに定められた自己の姿が映し出されるがゆえ、自分自身は常に分身から一歩遅れて生き続けなければならないという構図が、複数のメルヴィル作品において共通してみられることが分かった。メルヴィルは、こうした自分の分身に対する「遅れ」を頻繁に描いているが、一貫してその遅れを解消しようとはしない。なぜなら、作品内で意識的に両者の不一致を描き続けることで、神意を追いかけつつも完全一致はせず、自由意志を尊重した生き方を模索したからである。メルヴィルは自分の内面における神意と自由意志の分裂を否定的に捉えず、むしろ創作活動の重要なインスピレーションであると考え、自己理解の手掛かりとしていたといえる。また、このような一人物の内面における分裂と宗教的問題の関連性を、矛盾や不一致が特徴であると考えられてきたアメリカロマン主義文学の一変奏として議論することで、本研究の成果をアメリカ文学史研究の文脈に位置付けることができた。	

研究テーマ	証明論による認識論理研究
R A 氏 名	そ 蘇 ゆう あん 有 安
専攻・専修・学年	思想文化専攻 哲学専修 博士後期課程3年
指導教員氏名	佐 野 勝 彦
研究成果の概要	
申請者の研究目的は、古典と直観主義論理の区別と関連は、認識論理の分野において、いかなる帰結をもたらすかということを証明論的に解明することである。証明論的な手法は、エージェントが自身の認識について推論の側面を捕捉することに優れている。また、推論の側面も直観主義論理を研究する上で重要な側面である。そのため、平成31年度の研究は、Artemov and Protopopescu (2016) が提示した直観主義認識論理体系 IEL について展開した。 【1】Artemov たちの体系に対し、Krupski and Yatmanov (2016) が推件式計算を与えた。しかしながら、その体系は推件式計算の最も重要な性質の一つである部分論理式的な性質を満たしていない。筆者は、指導教員と協力して適切な推件式計算を考案し、さらに基本定理であるカット除去定理を意味論的に証明し、IEL の有限モデル性をも証明した。【2】Artemov and Protopopescu (2016) にはすでに IEL を一階述語論理に拡張する構想が含まれており、さらに認識論理の父である Hintikka (1962) においても、一階述語認識論理の有用性がすでに立証されていた。そこで、筆者は IEL の命題論理シーケント計算に対して述語論理規則を加え、IEL のクリプキ意味論も量子子をカバーするように拡張した。この新しくできた体系 QIEL が意味論に対して健全かつ完全になることを証明した。【3】国際会議の LORI2019 での研究討論で、IEL 研究においてクリプキ意味論と BHK 解釈の行き違いが指摘された。そこで、筆者はその点について更なる研究を展開した。筆者は Brouwer に由来する「理想的数学者」を取り上げて、理想的数学者における検証を約束された将来の証明として解釈した。	

研究テーマ	漢籍訓読資料の位相差における漢音モデル化
R A 氏 名	ちよん 鄭 む の 門 鎬
専攻・専修・学年	言語文学専攻 言語科学専修 博士後期課程3年
指導教員氏名	池 田 証 壽
研究成果の概要	
1 研究の方法と目的 本研究は漢籍訓読資料のうち、平安末から南北朝までの約300年間に書写された古鈔本（もしくはその時期の加点本に準ずる）儒教経典と文学作品6種の典籍・42種の資料を分析し、各資料に書き込まれている漢字音注記（仮名音注・声点・反切注及び同音注）の用例を収集する。その上で、作成者（加点者）が属する学問集団（博士家・仏家）と系統に分けて現れる差を数値化して示すことを目的とする。 2 得られた成果 第一に、仮名音注の分析を行うに当たっては、日本語の音韻変化を反映して表記の揺れが見られるもの、個人（集団）別の差を反映したものと考えられる部分とに大別し、その傾向を確認することができた。その中で、舌内・唇内撥音韻尾の例を挙げると、諸本の系統と集団も無論関係するが、個人が持つ表記の規範によって、バリエーションが見られることが確認できた。 第二に、声点の部分に関しては、中国語音韻学（『切韻』系韻書の分類）における四声と漢音声調とのずれから見られる部分に着目し、分析を試みた。声点に関しては特に、同時代の加点資料であっても、加点の意識は各博士家によって異なることが確認できた。 第三に、反切注・同音注に関しては依拠すべき注釈書の有無の点と各テキストに書き込まれているこれらの注記の数という点に注目した。反切注・同音注は典籍によって緊密な関係があるにも関わらず、同じ系統の典籍でも作成の目的によって書き込みには大きな数値的な差があることが見られた。 3 今後の展望 本研究では、比較的現存資料の量が多い漢籍訓読資料の儒教経典・文学作品の古鈔本を分析した。その他にも古版本および『史記』『漢書』などの歴史文献を対象にして、視野を広げていきたい。	

研究テーマ	近代朝鮮における美術史研究と京都学派哲学
R A 氏 名	ふく い よし たけ 福 井 慶 丈
専攻・専修・学年	人文学専攻 日本史学専修 博士後期課程2年
指導教員氏名	権 錫 永
研究成果の概要	
【研究の目的】①植民地期（1910-1945）の朝鮮知識人たちによる美術史研究の形成過程をあとづける。②現在の韓国美術史がはらむ問題点（固定性、排他性）を克服する契機を、それら形成期の美術史研究の中に探る。③彼らが参照した日本の思想との関係を明らかにする。 【研究計画】新学問導入の窓口となった1910年代～20年代初頭の渡日留学生による「美術」関連の論説を読解、分析する。その際、従来の研究の図式や分類にとらわれることなく、各論者の個人史や前後の著作を踏まえた上で総合的に読み込む。対象は、安廓（アン・ファク）「朝鮮の美術」（1915年）、李光洙（イ・グァンス）「文部省美術展覧会記」（1916年）、金煥（キム・ファン）「美術論」（1920年）の三つとする。 【成果】各論者の個人史の検討やテキスト分析の結果明らかになったのは、彼ら三人が共通して朝鮮民族の啓蒙の一環として「美術」を論じている、ということである。一方、力点の置き方の違いにも注目した。すなわち、安廓は、朝鮮民族の独自性の追求を重視し、民族意識の覚醒を目的とする朝鮮学研究の一環として「美術」を論じたが、李光洙は、より文明の側に立ち、朝鮮社会にとっての「美術」の啓蒙的な効用や将来の美術家の輩出に重点を置いて「美術」を紹介した。この二人が、より直接的な手段として「美術」を受容したのに対して、金煥は、「美」や「美術」を「真」や「善」などの普遍的な価値体系の中で基礎づけようとした。このような金煥の「美術論」は、根本的には民族主義的な動機から出発しつつも、普遍性の側に大きく開かれており、「ナショナルなもの」だけに収斂するのではない美術研究のあり方に示唆を与えるものである。日本の思想との関係については、安廓の場合、複数の種本があり、基本的な事実の流用や語句の類似が見られるが、全体としては、安廓の目的に合わせる形で換骨奪胎的に受容したことが明らかにできた。李光洙については、日本の展覧会の見学体験に基づくものであるという以上には、特に参照したものは見出せなかった。金煥については、彼が在籍していた日本美術学校での教育内容も踏まえた上で、さらなる検討が必要である。	

研究テーマ	今文学派における「微言大義」の言説史
R A 氏名	よし だ つとむ 吉 田 勉
専攻・専修・学年	言語文学専攻 中国文化論専修 博士後期課程3年
指導教員氏名	卯 和 順
研究成果の概要	
清朝に活躍した今文学派は、経書の中でも特に『春秋公羊伝』を中心とする今文經典を尊重し、その研究に当たっては、訓詁名物に固執せず、直接に孔子やその弟子の「微言大義」を求めたとされる。確かに、彼らは一様に微言大義の闡明を標榜しているが、仔細に見れば、その語の内実は学者ごとに異なる。本研究は、この微言大義の語に着目し、学者ごとの用法の差異を明らかにすることで、今文学派における微言大義の語の継承と発展とを明らかにしようとしたものである。 研究の具体的な手段としては、今日、この語の定義として最も広く知られる皮錫瑞(1850～1908)『経学通論』の説を手がかりに、これを他の学者の説と比較することで、相互の関係を整理し、その影響を考察するという方法を用いた。皮錫瑞は『孟子』中の『春秋』に関する記述を根拠として、微言と大義とを別箇に定義しているが、同様に微言・大義を区別した学者として、宋翔鳳(1777～1860)の存在が知られている。また皮錫瑞自身も、その『経学歴史』や自身の日記の中で、他の今文学者に比べて宋翔鳳を高く評価していることから、特に宋翔鳳を本研究遂行上の鍵となる人物であると捉え、主としてその『論語説義』に基づいて、宋翔鳳の微言・大義に関する説を考察した。 その結果、宋翔鳳は『論語』公冶長篇の記述に基づいて微言・大義を分類・定義していることが確認されたが、皮説の最大の特徴と言える、『孟子』に注目した微言大義説は見出されなかった。このことによれば、両者の間には単純な影響関係は存在せず、それぞれは独自の微言大義説として理解すべきものであると言える。しかしながら、宋翔鳳の微言説を考察する過程で、そこには、彼に先行する恵棟(1697～1758)や錢大昕(1728～1804)といった漢学家の説の影響が見られることが明らかになった。このことは、今文学派の微言大義説が、その内部のみでなく、訓詁名物を重視する漢学家の説をも取り入れて形成されたものであることを示している。本研究により、従来、今文学派に特有のものとされてきた微言大義の語が、実は複雑な来歴を持つことが明らかになった。その言説史を考察するに当たっては、より広汎な視点から再検討を加える必要があろう。	